

べんきょうがきれいになるのは、なぜ？

小学生や中学生に、「どうして勉強が嫌いなのか」というアンケートをとると、かえってくる答えはたいてい次の3つにまとめることができます。

- ①「勉強が面白くない、つまらないから」
- ②「成績が悪くなって、叱られたり、バカにされたりするから」
- ③「親や先生に、無理矢理やらされるから」

「(勉強は)やればできる」ということを、実はみんなわかっているのです。「できるようにになりたい」という気持ちも、本当はみんなもっている。でも「最初の一歩」を踏み出すことが億劫で、面倒くさい。だから、結果としてやらない。



そんな子どもたちの背中を押してあげるためには、「勉強嫌い」の3つの理由の「逆」を追求すればよいことになります。それが「習慣づけ」と2つの「動機づけ」です。

まずは、学習の「動機づけ」をすること。

心理学では「動機づけ」を「外発的動機づけ」と「内発的動機づけ」に分類します。

「内発的動機づけ」とは「学びそのものが持つ本来の面白さ」を発見し、達成感や自己実現が得られることによって、「やる気」を引き出していくのです。どんなに成績が悪くても、小学校低学年のうちから「勉強が嫌い」という子はほとんどいません。人間はもともと他の動物とは違い、本能行動が未完成な状態で誕生してくる「未成熟」な生物です。生まれてきたばかりの赤ん坊でも、まわりの音や光などの刺激に敏感に反応し、なんでも触ったり、口に入れたいとします。身の回りにあるすべてのものに興味をもち、「これ、なあに」「ねえ、どうして」と、溢れんばかりの好奇心を示すのは、すべての子どもに生得的に備わったものです。その好奇心を刺激し、さらに大きくふくらませてあげることが、本当の「勉強好き」な子を育てていくのです。

「外発的動機づけ」とは、「褒めてもらえる」「認めてもらえ

る」「ご褒美がもらえる」といった、他人から与えられる「報奨」によって、やる気が出ることを意味します。

誰だって「叱られたり、バカにされたり」すれば、モチベーションは下がります。まだ幼い小学生であれば、面と向かって叱られなくても、他の子の成績と比べられて、お母さんが(ふう…)と小さなため息をついただけでも、「やっぱりボクはダメなんだ」と思い、学習意欲は低下します。成長のリズムは一人ひとり違うのですから、「他人と比べる」のではなく、「ちょっと前の自分」と比べて、「いまの自分」が少しでも成長したということ、認めてあげべきなのです。

そして「無理矢理やらされる」のではなく、学習の「習慣づけ」をすること。

「勉強嫌い」が身に染みついた中学生や高校生に「習慣づけ」をすることは決してたやすいことではありませんが、少なくとも小学校低学年のうちならば、正しい方法で指導することで、「毎朝歯を磨く」とか「プールに入る前に準備体操をする」と同じように、学習の習慣づけをすることがで

きます。

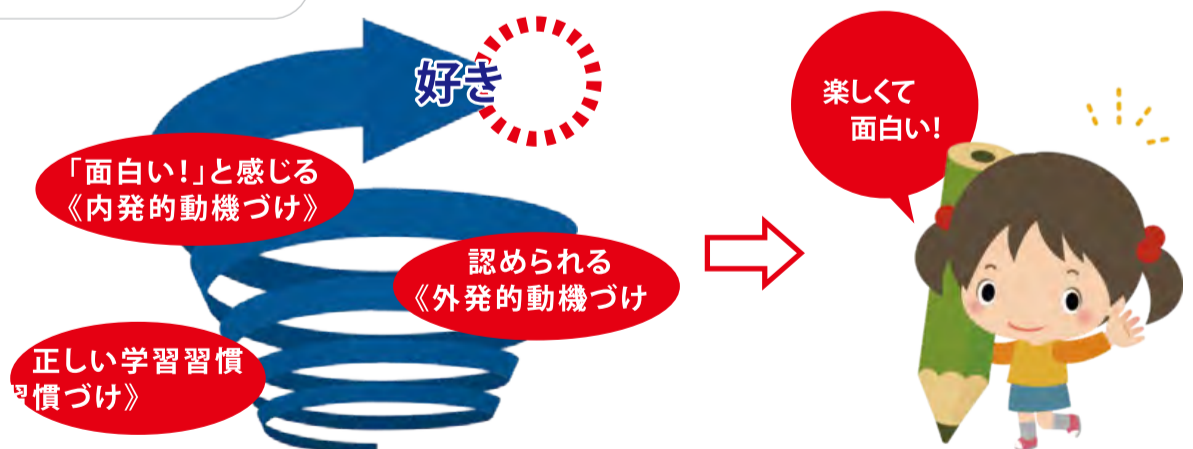
この「内発的動機づけ」「外発的動機づけ」「習慣づけ」の3つが、何らかの原因で損なわれたり、十分に培われなかった結果が、冒頭で紹介した「勉強嫌いの3つの理由」にそれぞれ対応していると、私たちは考えます。

さらにこの3要因は互いに相互作用や因果関係で結ばれており、どれかが欠けると「悪循環」をもたらします。たとえば「面白くない」→「わからない」→「叱られる」→「さらにやる気なくなる」→「学習習慣がつかない」というように。

逆に3つの要因のうちのどれかを満たすことによって、「好循環」に導くこともできます。「褒められた」→「やる気になった」→「できるようになった」→「面白くなった」とか、「面白い」→「もっとやってみたい」→「勉強する習慣がついた」→「できるようになった」→「褒められた」というように。

「勉強嫌い」の悪循環に陥らないようにすること、「勉強好き」の好循環を作り出すこと、「サナスタ」はそのために開発された学習メソッドなのです。

勉強好きの好循環



勉強嫌いの悪循環

